

～徐福が伝えたロマン...中泊町～

徐福中泊伝説 権現岬

● アジア最北端の漂着地権現岬
標高229メートル、断崖絶壁
の頂上から大パノラマが広がる
絶景地



● 岩頭に尾崎神社鎮座。航海
の目印であり、神々が住む
岬として往古から信仰さ
れている権現崎（小泊岬）

小泊の徐福伝説

中国を統一した秦の始皇帝に仕えた徐福という人が、始皇帝の命令で東海島（日本国）の蓬莱山にあるという不老不死の仙薬を求めて中国を出航。韓国済州島を経て対馬海流に乗って日本海を北上し、『津軽半島小泊（現中泊町）の権現崎に漂着した』という伝説である。

徐福不老不死の
仙薬を求めて上陸

尾崎神社と徐福



尾崎神社



権現崎東北自然遊歩道コース



尾崎神社秘蔵徐福木像



尾崎山（神社へ向かう遊歩道）



権現崎展望台より



権現崎遺跡出土品
硯（すずり）、永楽通宝ほか

権現崎岩頭には平安時代の大同2年（807）建立の尾崎神社が鎮座（伝）。その頃、修験者（山伏）の山岳信仰の聖地として山全体が権現として崇められた。古代に徐福は忍限尊と共に尾崎神社（尾崎大明神とも）の祭神「航海の神」として祀られていた時代もあったという。時代は過ぎ、江戸時代（1633年寛永10年頃か）になって神社名が飛龍宮と変わり祭神も飛龍権現（仏や神や人間の姿に変身して大空を飛び回り、苦しんでいる人を救う意）に変わる。徐福は祭神から脇侍と変わる。更に明治時代初期になって神仏廃止令が出てからは、神社名が再び尾崎神社となり、祭神は伊邪那岐命・伊邪那美命に変わる。徐福は現在も尾崎神社の脇侍「航海の神」海の守り神として祀られている。各伝承地に農業の神、海の神、雨乞いの神、織物の神、養蚕の神、医療の神、陶芸の神、航海の神、捕鯨の神。鍛冶屋の神、石屋の神、紙製の神等として祀られている。大祭は8月16日。昭和20年頃迄は女人禁制。昭和43年神社新築とする。天保2年（1831）年10代津軽信順、天保14年（1843）11代津軽順承藩主参拝。尾崎神社は海上安全、大漁祈願、不老長寿、家内安全、夫婦円満、恋愛・子授けの神、安産にご利益。

伝説のはじまり

徐福伝説の概要

中国の司馬遷が記録した歴史書「史記」によると、今から2200年以上前の（紀元前）219年の昔、中国を統一した秦の始皇帝の命により、徐福という人が、東海の三神山蓬萊・方丈・瀛洲にあるという不老不死の仙薬を求めて、童男童女数千人とともに船出した。しかし、仙薬を入手することが出来ず数年後に帰ってきた徐福が始皇帝に進言し、再び良家の男女3千人と五穀の種（米、麦、粟、黍、豆）や各種の百工（技術者）を用意させて渡航した。ところが徐福は広い土地を獲得して、その地の王となり、中国へ二度と帰ることはなかったという伝説である。「史記」秦始皇本紀28年の条BC紀元前219年と「淮南衡伝列伝」による。日本は弥生時代のころである。

中国・始皇帝とは

名は政。13歳で国王に即位（春秋戦国時代）38歳で中国全土を統一して国名を秦とした。自分の呼び名を光り輝く天の神北極星の意味として「始皇帝」と名乗る。万里の長城修築や文字（現在の漢字の元）、貨幣、度量衡（長さ・容積・重さ）などを統一した功績もあるが、その反面、政治を批評する罪のない学者（儒学者、方士）を谷底（鬼の谷）へ生き埋めにしたり、自分の国秦書以外の本を焼いたりした（焚書坑儒）独裁者であった。しかし、統一後15年で秦国滅亡。地下の謎の墓、始皇帝陵は兵馬俑（へいばよう）などで有名。すすく下前館に展示。中国の礎を築き上げた生みの親と讃えられている。享年50歳病死。

徐福とはどんな人か

BC278年中国斉の徐福村に生まれ（中華人民共和国江蘇省連雲港市韓愈県金山郷徐福村）、貴族の家柄で育ち秀才でしたが、秦の政（後の始皇帝）に滅ぼされ併合し、秦の琅琊台に住んだ実在人物である。徐は姓で、名は福。斉国（海岸）の出身。1982年調査によって徐福村が発見された。身分（職業）は方士（道士）といって不老長生術を行う呪術師、祈祷師、薬剤師など神の力を持つ人。現代風にいえば、天体、気象観測、医学、薬学、健康術などのハイテク全部を持った人、エキスパート（専門家）。（BC278～BC208没享年71歳）。

なぜ、始皇帝が不老不死の仙薬を求めさせたのか

始皇帝は権力、宝物などなんでも手に入れたが、歳を取ると肉体が衰え、死に近づくことが悩みだったので、いつまでも長生きして権力を保とうとした。当時、神仙思想が流行し、仙丹（不老不死の薬）を飲むと不老不死になることが出来ると言われた。仙丹は、渤海の海中にある三神山すなわち蓬萊・方丈・瀛洲で、そこに住んでいる仙人が仙丹をつくり不老不死の薬を持っていると言われていた。その薬を手に入れて飲めば、仙人のように不老長寿になれると言われていた。始皇帝はこの神仙にいたことがあるという方士（不老不死の薬を作る道士）徐福に不老不死の仙薬を求めて参れと命じた（霊薬、仙薬、神薬、妙薬、秘薬、仙丹は同意）。三神山とは渤海に多発する蜃気楼を神山に見立て海上神仙信仰、山岳信仰等と結びつけた海上に想定した架空の島山であり、仙人が住んでいる霊山と言われた。尚、蓬萊山は日本であろうと言われている。BC219年、始皇帝（40歳）が自分の作った法律が守られている確かめるため斉の国（山東省地方）を巡幸した時、方士徐福（59歳）と会う。始皇帝は永遠の権力を保つため、不老不死の仙薬を求めさせた。

始皇帝より仙薬求めの命を受ける

いつ頃、誰が伝えたのか

日本には平安時代末期から室町時代にかけて貴族や僧侶が「史記」を読んで伝え、更に修験者の本拠地熊野の霊地に伝わり、熊野信仰を広めた修験者たちが全国へ伝えたのではないかとされている。しかし、最近の調査では以前から徐福伝説があった地を修験者が訪ね、その地を修行の場所、聖地として巡国布教させたのではないとも言われている。小泊は江戸中期に修験者の尾崎一派（現、尾崎家の先祖）が伝えたと言われている。



徐福採薬図 佐賀



群像 山東・ロウヤ台

尾崎山で採した仙薬と定着諸説

薬草豊富な権現崎の尾崎山で採した薬草は、行者ニンニク（アイヌ語でキトビロ、アイヌネギ）、権現オトギリ草（弟切草・標本フランスのパリ植物館保管、）トチバ人参（竹節人参）アワビ。いずれも滋養強壮剤、血液をサラサラにするので脳梗塞、動脈硬化、ダイエットにも有効。尚、小泊の権現崎は日本二大名崎として長崎半島野母崎と共に有名である。①不老不死の薬を探すことが出来なかった徐福は、中国へ帰らなかった。心優しい下前の漁師に漁法・航海術・農業・薬草などを教え、この地に留まり秦国滅亡の2年前、徐福は70歳で死亡した。その後、神となって尾崎神社に「航海の神」、海の神として祀られた下前定着説。②江戸時代（正徳初年1711年頃）徐福の子孫が徐福像と観音像を持参して来村し、定住した説。③下前から去り岩木山麓で稲作を教え富士山麓へ行ったという諸説がある。BC208年2月8日、富士山にて70歳で死亡が通説。（神皇正統記による）墓は富士吉田市、熊野市、新宮市、佐賀県等。



行者ニンニク



トチバニンジン



地元：権現オトギリソウ
（学名：エゾオトギリソウ）



小泊（日本海）のアワビ

徐福と船の右檣

日本の船の檣はほとんど左檣、小泊地区も左檣だが、なぜか下前地区は右檣である。これは出航時、漁師の守り神である権現崎の尾崎神社に海上安全と感謝の姿を表していることと、神社に背を向けては失礼にあたるということだが、中国が右檣であることから徐福が伝えたのではないとも言われている。日本では左檣が一般的で九州の有明海の一部が右檣である。



下前・右檣をこぐ

中国から日本、そして小泊まで何日かかって来たのか

最近の調査では、北コース（日本海）、南コース（太平洋）とも秋に出航して順風であれば1週間～2週間で九州に着く。小泊へは北コース早春から初夏にかけ南西風を利用して中国出航一韓国の済州島一九州一対馬海流に乗って一日本海を北上し小泊岬まで約3週間～4週間である。南コースは冬、春北風を利用して、中国出航一東シナ海で日本海流黒潮に乗り一九州南・西岸一太平洋沿岸着。北も南コースも大体同日数。



「徐福渡図」（徐福公園、和歌山県新宮市）

日本人に何を教えたか

漁法、航海術、建築、織物、鉄工、造船、紙製、農業、稲作、酒造。徐福は日中韓を結んだ「幻」のエリート集団のリーダーであり、国交の始祖であり、ロマンの人ある。

徐福の変名

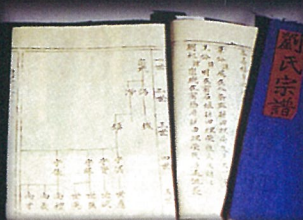
「徐」の名では殺されるから中国では、王、劉、韋（うえい）。日本では、秦、羽田、波多、福岡、福島、畑、福山、福田等の姓を名乗る。秦国滅亡のため徐福達は、後難を免れた。

最近判った渡来の動機

徐福は、秦の天下統一によって自分の斉の国が滅ぼされ、徐家とその一族が抹消され悪政に苦しむことは明らかであった。それを察知した徐福は、神仙思想に没頭している始皇帝の長寿欲求を巧みに利用して、巨額の資金を出させ始皇帝をあざむいての大冒険であり集団亡命であった。前途有望な若者数千人を引き連れて新天地開拓のため永久のユートピア（理想郷）を東海の国日本の神仙境に求め、二度と帰らない一大決心で集団移民したと言われている。



小泊村史より「渡航図」



歴史書「歴史誕生3より」角川書店より